

Newsletter

2019年（平成31年）3月15日発行

2019年（平成31年）

4月例会

日時：4月20日（土）14時より

会場：二松学舎大学3号館3021教室

①講師：茨城大学 清水恵美子

題目：20世紀初頭の美術交流における新納忠之介の活動

司会：日本女子大学（名誉教授） ソーントン不破直子

②講師：早稲田大学（非常勤） 南平かおり

題目：日本児童文学界におけるマルシャーク作品の受容

司会：千葉大学 佐藤宗子

5月例会

日時：5月18日（土）14時より

会場：二松学舎大学3号館3021教室

特集：「反米」が腐食する時代

—反米・嫌米・離米—

講師：東京大学 遠藤泰生、同 安岡治子

司会：日本大学 井上健

7月例会

日時：7月20日（土）14時より

会場：清泉女子大学2号館225教室

①講師：東京外国語大学（院） 陳璐

題目：北村透谷と陶淵明における「故郷」概念の比較研究

司会：昭和女子大学（名誉教授） 森本真一

②講師：駒沢女子大学 松山響子

題目：21世紀日本のシェイクスピア・アダプテーション

司会：日本大学 田中徳一

9月例会

日時：9月21日（土）14時より

会場：清泉女子大学2号館225教室

①講師：都留文科大学 菊池有希

題目：昭和前期におけるバイロニズム—鶴見祐輔と林房雄を中心に

司会：足利大学 茂木謙之介

②講師：公益財団法人翁久允財団 須田満

題目：翁久允と竹久夢二の旅と豪華客船ディナーメニューに見る昭和初期のガストロノミー

司会：日本大学 椎名正博

※ 印刷版のNewsletterでは、4月例会の清水恵美子先生のお名前、9月例会の菊池有希先生の発表題目に誤記がありました。正しくは上記の通りです。お詫びして訂正いたします。（東京支部事務局）

INSIDE THIS ISSUE

1. 4月・5月・7月・9月例会案内
- 2-3. 例会会場案内
- 4-7. 例会要旨等
8. 東京支部短信

幹事会開催のお知らせ

第1回幹事会

2019年7月例会後、例会会場にて開催します。

（幹事会構成員は、幹事、支部長、事務局長、各種委員会委員長、会計、会計監査です）

役員連絡会開催のお知らせ

2019年4月、5月、および9月例会終了後、7月は13時より、例会会場にて開催します。（役員連絡会の構成員は支部長、事務局長、会計を含む事務局委員、各種委員会委員長です。委員会の委員、幹事は含まれませんが、陪席を歓迎します）

4・5月例会会場

二松学舎大学

3号館3021教室

〒102-0074

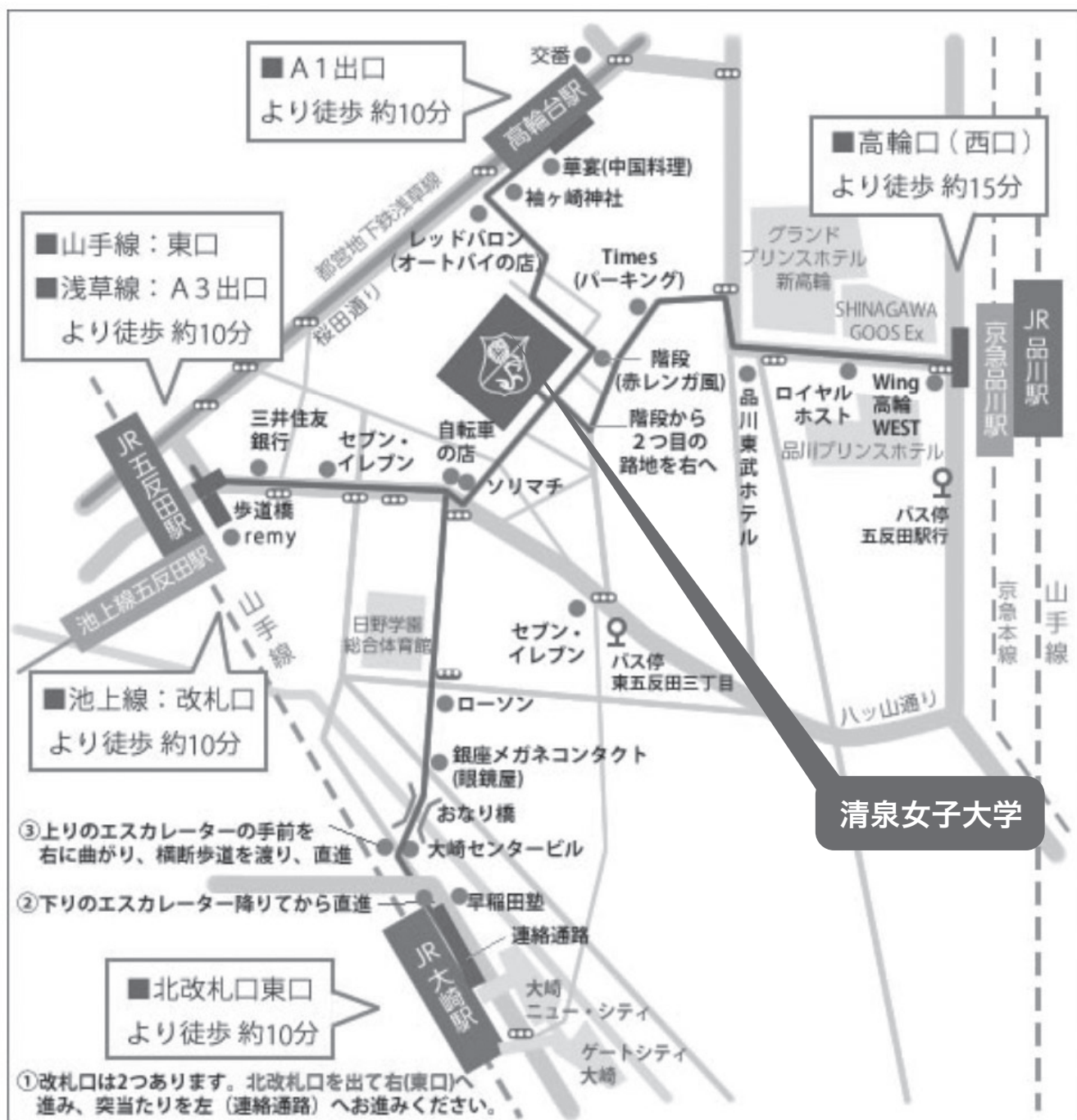
東京都千代田区九段南2-2-4

◆東西線 本草門線 都営新宿線
九段下車（2番出口）徒歩8分

◆JR総武線 有楽町線 南北線
飯田橋駅 徒歩15分

◆総武線 有楽町線 南北線 都営新宿線
市ヶ谷駅 徒歩15分





7・9月例会会場

清泉女子大学

2号館225教室

〒141-8642

東京都品川区東五反田3-16-21

◆五反田・大崎・高輪台駅

徒歩10分

◆品川駅

《五反田行》バス「東五反田3丁目」

徒歩5分

4 月 例 会 発 表 要 旨

20世紀初頭の美術交流における新納忠之介の活動

茨城大学 清水恵美子

近代日本の文化財保護の礎を築いた岡倉覚三(1863-1913)は、明治31年日本美術院の研究部(後の日本美術院第二部、現公益財団法人美術院)において古社寺保存法に基づく仏像修理を開始した。その中心となったのが新納忠之介(1868-1954)である。彼は岡倉の文化財保護の理念の継承者と位置づけられている。新納は損傷した仏像を数多く修理し、昭和21年に引退するまで仏像修理の最前線で活躍した。一方、新納は明治39年に来日したラングドン・ウォーナー(1881-1955)に仏像彫刻を指導し、明治42年ボストン美術館に派遣されて仏像修理、新館展示、美術館教育に従事するなど、岡倉を仲介として国際的なネットワークを構築していった。

これまで新納の研究は、主に仏像や文化財の修復保存の観点から行われ、国内での活動に焦点をあてるもので、国外との交流で成し遂げられた業績は等閑視されてきた。しかし、平成26年度に茨城県天心記念五浦美術館へ寄贈された新資料(新納忠之介旧蔵資料)約2,300点の中から、外国語の書簡や海外での活動が記された手帳、ボストン美術館や戦後の文化財調査視察の写真など、彼の活動がグローバルに展開されたことを示す資料が多く見つかった。報告者は同美術館の協力を得て、これらの資料の整理、調査を進めている。

本報告は、この調査の現時点での成果を紹介しながら、主に岡倉のボストン美術館勤務時代における新納の活動に焦点をあて、その意義を検討するものである。日米美術交流という視座から、新納の国際的な文化財保護活動の意義を考察する研究の端緒としたい。

※印刷版のNewsletterでは、清水恵美子先生のお名前に誤記がありました。正しくは上記の通りです。お詫びして訂正いたします。(東京支部事務局)

日本児童文学界におけるマルシャーク作品の受容

早稲田大学(非常勤) 南平かおり

1920年代から30年代はソ連の絵本の黄金期と言われている。この時代の革新的な絵本の創作活動を牽引したのは、画家のウラジーミル・レーベジェフ(1891-1967)とコンビを組み、数々の作品を世に送り出した詩人、劇作家、児童文学者のサムイル・マルシャーク(1887-1964)である。

日本では、マルシャークの作品はどのように紹介されたのだろうか。

日本の児童文学界において、マルシャークの作品が広く知られるきっかけになったのは、絵本ではなく、1953年に岩波少年文庫の1冊として刊行された湯浅芳子訳の戯曲『森は生きている(ロシア語の原題は「12の月」)』だと考えられてきた。例えば、マルシャーク生誕100年を記念して日本で発行された冊子『マルシャークと子どもたち』には「日本で翻訳出版された作品リスト」が発行年順に掲載されているが、最初に挙げられているのがこの作品だ。マルシャークは絵本創作の後、戯曲の主な作品を世に出したのだが、日本ではまず彼の後年の作である『森は生きている』に注目が集まり、その後「アイスクリーム」や「しずかなおはなし」などの絵本が邦訳されて日本の子どもたちにも親しまれるようになったと一般的に理解されてきた。つまり、彼の創作活動の歴史を顧みると逆の流れになっているのだ。

しかし近年、1930年代にマルシャークの絵本がすでに日本で紹介されていたことが美術評論家の研究により明らかになり、発表者は日本におけるマルシャークの作品について改めて検討する必要性を感じている。

マルシャークの作品がそれぞれの年代でどのように翻訳、紹介されたのか。本発表では、マルシャーク作品の邦訳の歴史を整理し、当時の児童文学界がおかれていた状況を考察しながら、マルシャークの日本児童文学界における受容について論じたい。

5 月 例 会 発 表 要 旨

特集：「反米」が腐食する時代

—反米・嫌米・離米—

東京大学 遠藤泰生、同 安岡治子

反英、反独、反中など、ある特定の国の名に「反」という語を付けて、その国が象徴する文化や時流を批判、侮蔑する例は、世界史上幾つも存在する。けれども、その言葉が語られた空間的なひろがり、時間的なひろがりにおいて、「反米」ほど多くの国々で人々の口にのぼった言葉はない。少なくともアメリカ合衆国が誕生した後の時代においてはそう言えよう。しかし、その言葉の精確な意味を掴むことは思ったよりも難しい。例えば、ある者はアメリカ合衆国によって立つ社会原理への批判を「反米」と総称し、またある者は現代国際政治におけるアメリカ合衆国への批判を「反米」と捉える。「反米」に一定の知的体系が備わっていると考える論者は「反米主義」という言葉でその構造を把握しようと試み、一過性の時事問題としてしか「反米」を捉えない者は、「反米運動」といった動的イメージを付してその運動の概形を議論する。曖昧模糊として理解の共有が難しいそうした「反米」を口にしながら、つまるところ世界の人々はいったい何を語ってきたのか、あるいは語ろうとしてきたのか。

以上の問題関心から、本報告では二つの国に便宜上焦点をあて、ふわふわと雰囲気のように浮遊する、しかしそれでいて決して途切れることなく漂い続ける「反米」意識の捕捉と、その意味の読解を試みる。まず遠藤は、現代日本の文芸・社会思潮における「反米」のひろがりにあらためて焦点をあて、とくに、世界でも例外的に親米と称される日本社会が「反米」の言説をかくも自然に受容してきたことの意味を考える。近年刊行された大衆娯楽小説の世界にも頻出する侮米・離米の意味も合わせて議論したい。一方で安岡は、20 世紀の初頭以来、アメリカ合衆国の対抗軸としてその存在を内外に顕示してきたソヴィエト連邦・ロシアにおいて、愛憎半ばする対米意識が育んだ文芸・社会思潮における「反米」の流れを確認し、アメリカ合衆国の実態とは必ずしも重ならない「アメリカ」を内外の知識人が論ずることの意味を再考する。1920 年代の作家プラトノフの SF 小説に見られるアメリカ文明へのアンビヴァレントな眼差し、ソ連崩壊後に台頭した新ユーラシア主義の鏡像としてのアメリカ理解などが議論の遡上に登る。

総じて現代は「反米」が腐食し始めている時代かもしれない。共生の代償として活気づいた「反米」が覇権の黄昏を予告しているようにも見えるからである。20 世紀の宿痾として文芸・社会思潮に輝きを放った「反米」は、しだいにその光を失うのだろうか。「カモン・ベイビー・アメリカ♪」と明るく踊る日本の現在を問いながら報告を行いたい。

。

7 月 例 会 発 表 要 旨

北村透谷と陶淵明における「故郷」概念の比較研究

東京外国語大学（院） 陳璐

明治時代の知識人が一般的に備えていた漢文の教養を、北村透谷（1868-1894）もまた備えていた。東洋的要素は、彼の漢詩に限らず、さまざまな詩作品から評論文に至るまで色濃く顕れている。しかし、北村透谷研究史上において、数多くの論は、キリスト教入信、西洋文学からの影響などを視座にしてきて、東洋との関連性は、特定の作品や老荘思想など伝統的思想との類似に限定されがちで、十分検討されてきたとは言い難い。

東洋との関係の中で、最も見過ごすことができないのは、陶淵明（365-427）が無弦の琴を愛撫して心の中で演奏を楽しんだという有名な故事に由来する「無絃の大琴」という言葉を、北村透谷が自身の内なる精神の神髄をなすものとして文章に表出していることである。透谷がこの言葉で「無絃の大琴懸けて宇宙の中央にあり」（『万物の声と詩人』1893）と宇宙の至理を表象したところから、従来多く論じられてきたキリスト教者としての透谷とは異質な透谷像が浮かびあがってくる。

「昨日は淵明が食を乞ふの詩を読み、その清節の高に服し、今夜は惨憺たる実聞をもとし、思はず袖を湿らしけり」（北村透谷『鬼心非鬼心』1892）と記されているように、透谷が陶淵明を読んでいた事実は複数の文献から明らかである。陶淵明が無弦の琴を弾いたという有名な故事は『菜根譚』にも収録されており、星野天知の回想録に「或年、小石川後楽園で学校の親睦会があった。その伯夷斎堂に瞑想孤坐する私を見出して透谷が小冊子を渡した。それは菜根譚であった。」（星野天知『黙歩七十年』1938）と記されているように、透谷は『菜根譚』も愛読していた。

本研究は、まず「無絃の大琴」という言葉に着目し、桃源郷を「故郷」とし隠遁生活の中で無弦の琴を弾く陶淵明に対し、透谷は「無絃の大琴」が象徴する想世界としての「故郷」を、人間が生命を更新し詩人に生まれ変わる場所として捉えていたことを確認する。さらに、陶淵明と透谷における「故郷」概念の相違を踏まえて、透谷が如何にして東洋の伝統的要素を越えようとし、そのエネルギーを果敢な言語実践として燃焼させ、彼の詩業に結実させたかを実証する。

21世紀日本のシェイクスピア・アダプテーション

駒沢女子大学 松山響子

「シェイクスピア」の作品は、現在でも英語圏の文学テキストの代表として、あるいは英国文学の代表として取り扱われることが多い。そもそも戯曲であるシェイクスピアの作品はイギリス本国を含め、英語の影響力が及ぶ範囲の地域において絶え間なく上演されている。日本もその例外ではない。日本におけるシェイクスピアの初演は『ヴェニスの商人』を『何桜彼桜銭世中（さくらどきぜにのよのなか）』として翻案したものである。その後も小説やその他のジャンルへの書き換えや潤色、翻案というアダプテーションは絶えず行われている。

21世紀になってもこの伝統は変わることはなく、シェイクスピアのマンガ化は英語圏に輸入され Manga Shakespeare というシリーズとなり、シェイクスピア上演を恒常的に行う劇場などではお土産として堂々と売られている。最近の日本では、ライトノベルのジャンルでは吉村りりかの『恋するシェイクスピア』シリーズやあまおう紅の『恋縛 ロミオとジュリエット異聞』などがあり、マンガでは藤中千聖の『シェイクスピアのお気に召すまま』や、榎やなの『黒執事』、城平京の『絶園のテンペスト』、菅野文の『薔薇王の葬列』など数え上げるのが難しいほどの数となっている。マンガの中でも『黒執事』と『絶園のテンペスト』はアニメ化をされており、これまでシェイクスピアを目にすることがなかった世代や人々にも影響を広げている。発信するジャンルが変化したことにより、21世紀日本の「シェイクスピア」受容がより幅広い層に実際に届くのか、マンガ化アニメ化の影響が年代あるいは期間限定のものであるのかを論じていきたい。

9 月 例 会 発 表 要 旨

昭和前期におけるパイロニズム—鶴見祐輔と林房雄を中心に

都留文科大学 菊池有希

「前世紀、勃興期の英吉利とパイロンの熱情とは別個のものではない同じ力の現れである、現代、地方国家より世界国家へ転身しつゝある日本の運命は、正しくパイロンのものとは結びつかざるを得ない。」これは、1936（昭和11）年5月28日の『読売新聞』朝刊に載った本荘可宗「パイロニズムと現代“パイロン全集”を読んで」という記事の一節である。この記事自体は、岡本成蹊他訳『パイロン全集』全5巻（昭和11年）の刊行を受けての一文であるわけだが、ここで注目すべきは、「勃興期の英吉利」を支えた自由貿易帝国主義の思想と、自由を重んじる「パイロンの熱情」とが軌を一にしていると捉えられていること、さらにその「パイロンのもの」が「世界国家へと転身しつゝある」当時の日本の帝国主義的傾向と響き合うものとして称揚されていることである。ここには、リベラリズムとナショナリズムとインペリアルイズムとを結ぶものとして「パイロニズム」を捉え、そこに「パイロニズム」の現代的意義を見出そうとする記事の書き手の意識を看取することができる。

このようなパイロニズム理解・評価は、大東亜戦争に向って混迷してゆく当時の時代状況・時代精神の一面を反映したものと見ることができるわけだが、昭和前期の主なパイロン受容者たちのパイロニズム理解・評価も、やはりリベラリズム、ナショナリズム、インペリアルイズムとの関係性において形作られているところがあった。本発表では、前著『近代日本におけるパイロン熱』（2015年）においては十分に扱えなかった、『英雄天才史伝 パイロン』（昭和10年）の著者の鶴見祐輔と、『壮年』第一部（昭和12年）以降の林房雄とを特に取り上げ、彼らがリベラリズム・ナショナリズム・インペリアルイズムとパイロニズムとの関係性をどのように意識し、表現していたのかを明らかにしていきたい。そして昭和前期におけるパイロニズムについて新たな視点からの再解釈を試みたい。

※ 印刷版のNewsletterでは、菊池有希先生の発表題目に誤記がありました。正しくは上記の通りです。お詫びして訂正いたします。（東京支部事務局）

翁久允と竹久夢二の旅と 豪華客船ディナーメニューに見る昭和初期のガストロノミー

公益財団法人翁久允財団 須田満

北米西海岸で移民地芸を提唱した翁久允（1888-1973）は、帰国後 1924 年に朝日新聞社に入社し、『アサヒグラフ』や『週刊朝日』の編集に携わり、数多くの文壇人と交流する。在米時代から竹久夢二（1884-1934）の絵に親しんでいた久允は、夢二との親交を深めて、雑誌の取材旅行にたびたび夢二を同行させた。そして久允が朝日新聞社退社後の 1931 年 5 月、二人はともにアメリカへと旅立つ。アメリカ各地で夢二展を開催後に、ヨーロッパに渡り、夢二はフランスに滞在し、久允はインドを目指すという世界旅行の計画だった。しかし、横浜出発後三カ月で二人は袂を分かち、久允にとっても夢二にとっても、人生の岐路に立つ旅となった。

夢二は在米邦人を頼って転々とした後、1932年に渡欧、1933年に帰国するが健康を害し、翌年に生涯を閉じた。久允は1932年に帰国し、同年末からインドを旅行し、インドの思想や仏教に対する関心を深め、1936年富山市で郷土研究誌「高志人」を創刊し、逝去するまで38年間刊行した。

本発表では、高志の国文学館の協力を得て目録化を進めている久允や家族の手元に残された未公開を含む資料の中から、朝日新聞社の元上司鎌田敬四郎の久允宛書簡等を引用し、久允の朝日新聞社退社前後の精神的葛藤や夢二との旅行を決意するに至った経緯や平穏だった船旅の様子を、ジャンルを異にする二人の芸術家の交流から決裂に至る過程をたどり、久允と夢二が何故袂を分かちることになったのか、その理由の解明を目指す。

また、渡米時に乗船した日本郵船の豪華客船「秩父丸」と「龍田丸」の一等船客向け英文ディナーメニューに久允が家族宛にペン書きで綴った8通の書簡等により船内の食事の様子や感想が窺える。久允と夢二が乗船した昭和初期は、日本のフランス料理界発展に貢献したスイス人・サリー・ヴァイル（1897-1976）が横浜に新設されたホテル・ニューグランドに総料理長として 1927 年に来日し、顧客の多数がアメリカ人であることから 1930 年に5カ月間米国視察した後に、同ホテル内にグリルを設置した時期でもある。横浜港からハワイまでの全航路のエスコフィエ風のフランス料理メニューを評釈することで、久允と夢二が渡米したこの時代に、食文化史的な視野からも光を当ててみたい。

東京支部次期役員選挙の結果

2018年10月21日、東京支部大会の会場にて次期役員（支部長、幹事、会計監査）の選挙が行われました。その結果、次期支部長として佐藤宗子氏が選出され、同日開かれた総会において、佐藤氏より当日の幹事会の議を踏まえて、次期事務局長候補として堀啓子氏が提案され、承認されました。選挙で選出された次期幹事は下記の通りです（敬称略）。役員の任期は2019年6月より二年間です。

【幹事】 新井潤美、生駒夏美、近藤圭一、佐藤裕子、戦暁梅、銭国紅、ソーントン不破直子、徳盛誠、中地幸、西村靖敬、日中鎮明、南明日香、源貴志、安元隆子。

【会計監査】 田中徳一、増田裕美子。

なお、役員のうち各委員会委員長は、6月以降、新幹事会によって選任されます。

第57回東京支部大会発表者募集

2019年10月19日（土）、東海大学高輪キャンパスにおいて、第57回東京支部大会が開催されます。研究発表を希望される方は、氏名、住所・連絡先（電子メールアドレス）、所属、及び、発表題目、400～600字程度の発表要旨をメール添付で、6月8日（土）必着で事務局 shiina@chs.nihon-u.ac.jp までお送りください。発表時間は25分、質疑応答が10分です。なお、申し込み受付の返信をお送りしますので、ご確認ください。

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』への投稿について

電子版『日本比較文学会東京支部研究報告』は、原則として毎年一回、11月末日に発行されます。研究論文の投稿資格を有する者は、本学会員で、前年および前々年に開催された東京支部例会または東京支部大会において研究発表や講演を行った者としてします。投稿論文の提出期間は8月16日から8月31日までで、送付先は下記の通りです。

日本比較文学会東京支部編集委員会委員長 西村靖敬 nishimur@faculty.chiba-u.jp

詳しい投稿規定および執筆要領、投稿用のテンプレートは東京支部ホームページに掲載されていますので、どうぞご覧ください。ご質問がある方は支部事務局に電子メールでお問い合わせください。

月例会発表者募集

支部月例会の発表者を募集しています。申し込みは支部事務局（shiina@chs.nihon-u.ac.jp、6月15日以降は hikakubungakutokyo@gmail.com）に氏名、所属、題目、連絡先（メールアドレス、電話）を明記したうえで、600～800字の要旨を添えて電子メールで送信、または郵送でお願いいたします。支部役員に託されても結構です。発表時間は45分（質疑応答を除く）です。

日本比較文学会東京支部事務局移転のお知らせ

このたび、日本比較文学会東京支部事務局長の任期満了により、2019年6月15日より堀啓子氏（東海大学）が新事務局長に就任し、それとともない、東京支部事務局が東海大学に移転いたします。

つきましては6月15日以降、月例会、東京支部大会発表申し込み等のご連絡は下記のところにお願いいたします。

〒259-1292

神奈川県平塚市北金目4-1-1

東海大学 文化社会学部 文芸創作学科

TEL: 0463-58-1211

日本比較文学会東京支部ニューズレター125号

発行人：ソーントン不破直子

編集委員会（編集担当）

委員長：西村靖敬

委員：高柳聡子 永井久美子 信岡朝子 堀江秀史

事務局（発送担当）

事務局長：椎名正博

事務局委員：鈴木美穂 土田久美子 芳賀理彦 畑中健二

福島君子 蒔田裕美 茂木謙之介 森本真一

JCLA

日本比較文学会東京支部

事務局住所

〒156-8550

東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部 総合文化研究室

椎名正博研究室

TEL/FAX: 03-5317-9715 / 03-5317-9424

E-mail: shiina@chs.nihon-u.ac.jp